

古典派音楽の時代

啓蒙思想と「芸術」の誕生 の頃
(1740年頃～1809年頃)

サウンドデザイン演習
女子美術大学 石井拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp

18世紀のヨーロッパ。

この時代の音楽の文化的な意義とは？

18世紀のヨーロッパにおいて

「神に捧げるためでもなく、

王侯を賛美するためでもない、

『市民による、市民のための、市民の心に訴える音楽』が、
初めて生まれたのである」

[岡田 2005 :96]

本日の流れ

1. 「古典派音楽」が生まれる時代背景

※音楽に限らず「芸術の誕生」に関わるうえで重要

2. 「古典派音楽」の音楽的特徴

3. 「古典派音楽」の代表的作曲家

「古典派音楽」が生まれる時代背景

1
時代背景

「古典派音楽」が生まれる時代背景

「啓蒙主義とは『伝統社会』からの脱却である」

「〔ヨーロッパの〕『伝統』の破壊と『新しい価値』の創造こそが
啓蒙主義精神の主眼だった」

「啓蒙主義とはまさしく人間を『神』とする思想だった」

松宮秀治『芸術崇拝の思想』pp. 80-82.

「古典派音楽」が生まれる時代背景

1
時代背景

- 啓蒙思想（けいもうしそう）とは

「古典派音楽」が生まれる時代背景

- 啓蒙思想（けいもうしそう）とは

- 17Cから18Cの西欧における旧弊打破の革新的な思想
- 合理的理性を尊重し、進歩主義を標榜をした
- 理性的思惟によって宗教的権威や王侯貴族に抵抗した
- 政治、教育を通して人間生活の幸福の増進を理念とした
- 基本的人権（自然権＝人が生まれながらに有する権利）の萌芽
- その成果は『百科全書』（ディドロら編, 1751-80）に編纂された

「キリスト教・王侯貴族」のためから、「市民」のための生活へ

啓蒙思想 → 市民革命(フランス革命)

1
時代背景

啓蒙思想 → 市民革命(フランス革命)

- ・ 絶対主義を解体させて、近代に特有な「市民社会」を実現させる革命
- ・ ここでの「市民」とは？
 - 国政に参加する国民。国の形成に自律的・自発的に参加する人。
 - 市民 = ブルジョアジー（大土地所有者、資本家、高級官吏、非貴族）
 - 近代国家における象徴的存在
- ・ 「宗教的権威」と「王侯貴族」からの人間の自立（近代のはじまり）
- ・ 基本的人権の確保（言論・表現の自由）
- ・ 「自由、平等、友愛」のスローガン

啓蒙思想と「芸術」(近代芸術)

「古来、進歩的思想という、もっとも広い意味での啓蒙が追求してきた
目標は、人間から恐怖を除き、**人間を支配者の地位につけるということ**であった」

[ホルクハイマー & アドルノ：3]

「人間が世界の主人となるということは
人間がみずから神に代わる存在となることを意味する」

[松宮：80]

「『**芸術家**』とは**理念的にはみずから神となって**、自己の作品を通じて、
歴史と社会がいまだ発見しえなかった新しい価値を創出する
『**創造者**』となることである」

[松宮：67]

啓蒙思想 と「芸術」 (近代芸術)

啓蒙思想と市民革命を経た近代において、

ヨーロッパは、18世紀に至り、ついに、

個人における個性的な創作としての芸術が誕生する基盤が整う。

つまり、この時期にいたって、

現代の我々が考える一般的な意味での
「芸術」がうまれはじめる。

「自分のための表現」 & 「創造性の開示」としての「芸術」

啓蒙思想と「芸術」（近代芸術）

「『芸術』という概念がヨーロッパの芸術理論において確立したのは、十八世紀中葉から末葉にかけてのことである」

「十八世紀中葉以前には、今日われわれが『芸術』と呼んでいるものを〔略〕指し示す概念ないし術語は存在しなかった」

「『芸術』という概念は「近代」の所産にほかならない」

※上記全て [小田部 2001: 3]

1 時代背景

※ 近代的な「芸術」の誕生をうながす
大きな要因となった「フランス革命」
の様子を、映像で観ておきたい。

テレビ映画作品 『王妃マリー・アントワネット』(2006)
(フランス制作, 抜粋 20分程度)

(※ ソフィア・コッポラによる映画よりも見応えがある !?)

啓蒙思想の反動

「ホルクハイマーとアドルノの啓蒙主義論は、
「進歩」の概念と思想のなかに〔略〕

絶対主義的な暴力の反映と、
やがてきたるべき共産主義〔略〕、ファシズム〔略〕、
産業主義の大衆誘導の暴力、
つまり人間性剥奪の暴力の偏在化を告発する」〔松宮：72〕

啓蒙思想の反動（近代芸術への批判）

- 西洋中心主義
- 要素還元主義

芸術の「本質」をさぐるために、他の表現要素にたよらない〈自律的な芸術〉への志向

- 進歩主義

「旧来の新しさが、藝術家の意欲に基づくものにすぎなかったのに対し、近代芸術における新しさは、芸術のイデオロギー〔※ 思想風潮〕の要求する必要事項」〔佐々木：191〕

- 人間中心主義

「世界のいかなる文化圏、文明圏も西欧の啓蒙主義のような不遜な思想をもつことはなかった。どの文明も人間以上の存在者を認め、それに服することによって世界と共存してきた」〔松宮：80〕

市民革命と「展示」

- ・ フランス革命以後「ルーブル美術館」の前身ができる。

「ミュゼ・ドゥ・ラ・ルピュブリック」

(フランス共和国中央芸術博物館)という名の美術館が開館 (1793)

- ・ 「万国博覧会」が始まる (パリ)

万国博覧会のルーツ「国内博覧会」(パリ, 1798) = 様々な物品を集めて展示する博覧会
1849年までにパリで11回開催

- ・ 文化芸術の担い手が、王侯貴族から「市民」へと移行

2. 「古典派音楽」の音楽的特徴

2

音樂的特徵

年代時期 と 音楽的特徴

・【時 期】 1740年頃 → 1809年 (ハイドンの死)まで

【前史】

- バロック (劇的表現、重厚 (通奏低音)、構築的)
- ロココ (装飾的表現、優美・軽快、貴族的)



古典派音楽 (理知的表現、自然な感情発露、等身大の人間像)

ロ可可様式

(ちなみに)



D.ツィンマーマン設計 「ヴィース巡礼教会」(1745頃) (ドイツ)

ロ可可様式

(ちなみに)

2
音楽的特徴

- ロ可可音楽（古典主義の前の音楽様式）

装飾的表現、優美・軽快、貴族的・フランス的

フランソワ・クーブラン(1668-1733)

- フランスのルイ15世時代の宮廷作曲家
- ギャラント様式
- ロ可可音楽の代表作に「クラウザン曲集 1巻～4巻」(1720年頃)

<http://ml.naxos.jp/album/fl23090>

(試聴: NAXOS Music Library より)

古典派音楽の特徴

2 音楽的特徴

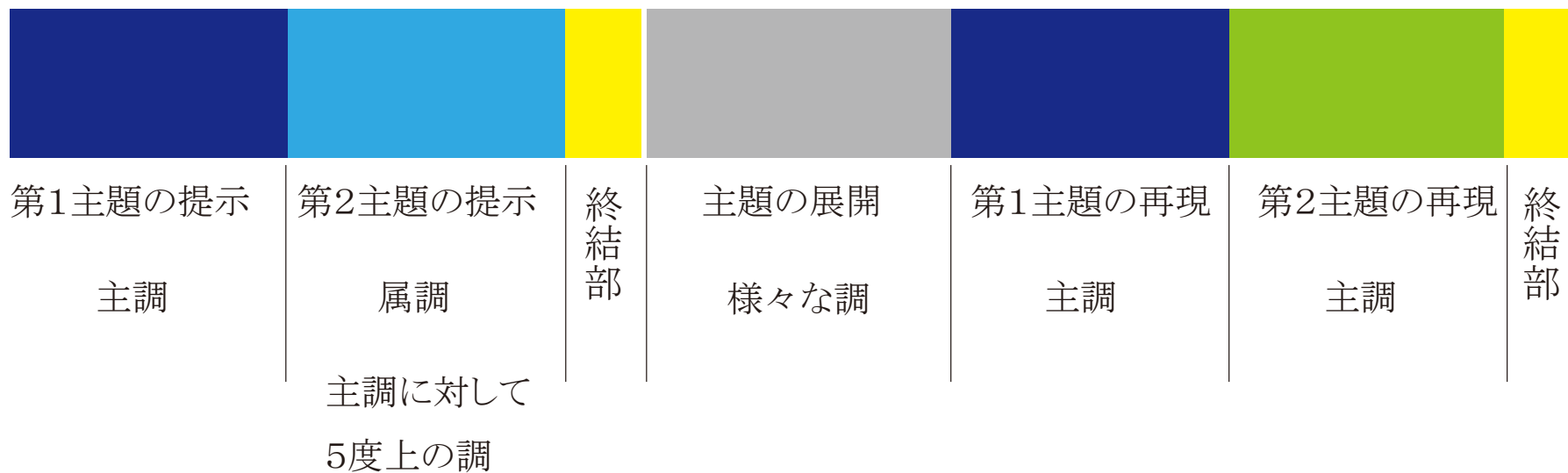
- ・他の要素に頼らない**自律的な音楽表現**を追求 → 声楽から**器楽**へ
- ・オペラ、協奏曲 から → **ピアノソナタ、交響曲、弦楽四重奏曲**へ
- ・宮廷音楽(王様のための音楽)から → 個性を表現する音楽の萌芽
- ・対位法の様式(旋律の重なり)から → 和声音楽へ
- ・「自律的な音楽」の形式としての「**ソナタ形式**」

古典派のソナタ形式とは

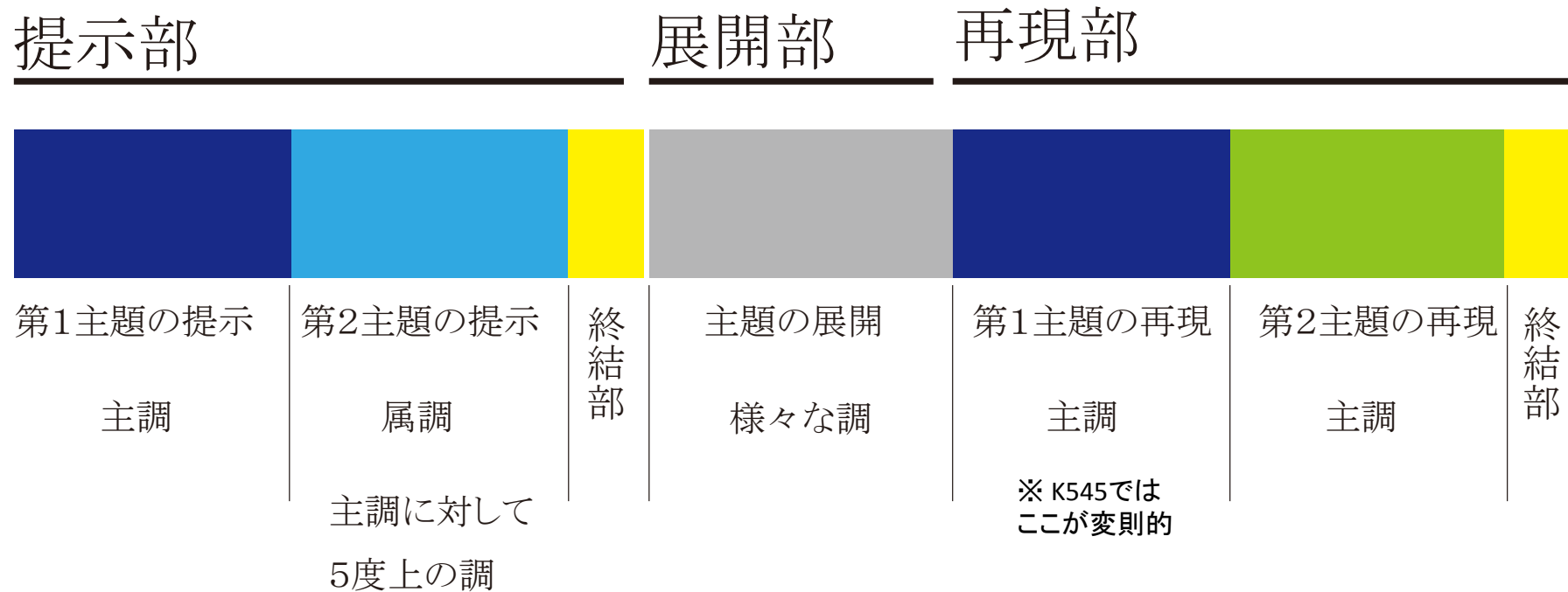
提示部

展開部

再現部



古典派のソナタ形式とは



(※ モーツァルト ピアノソナタ 第15番 第1楽章 K545 の例 で解説, 3分30秒)

3 作曲家

古典派の作曲家

3
作曲家

古典派の作曲家



フランツ・ヨーゼフ・ハイドン
Haydn, Franz Joseph

(1732-1809)

『弦楽四重奏曲 第77番 皇帝』
～第2楽章



ドイツ国歌。

もともとは
オーストリア皇帝フランツ1世の
誕生日に捧げた曲 (1797)。

ヨーゼフ・ハイドン

(彼の生活)

- ・少年期は教会の合唱団員。しかし声変わりで解雇。
- ・まともな音楽教育を受ける機会がすくなかった
- ・10代後半からの10年間は、不遇のウィーン生活。貧困と独学。
- ・ハンガリーの貴族の宮廷楽長としての職務を30年間勤める。
- ・退職後、年金を貰いながら、さらにウィーンでの音楽活動を行う。
- ・オクスフォード大学から名誉音楽博士号授与。

古典派の作曲家



W.アマデウス・モーツァルト
Mozart, W.A.

(1756-1791)

『アヴェ・ヴェルム・コルプス』
K.618 (1791)



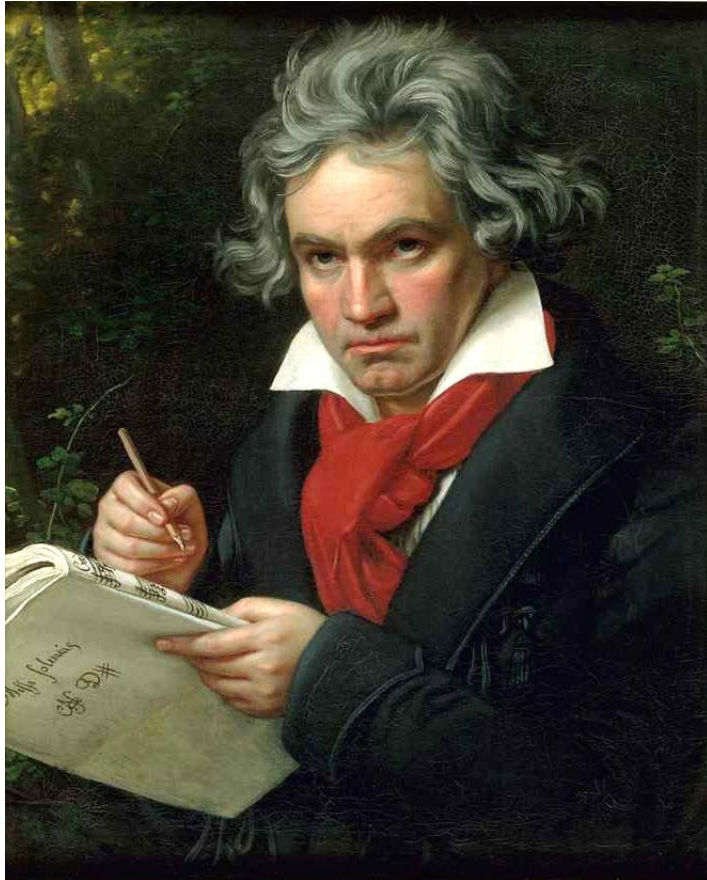
最晩年の傑作。
リストやチャイコフスキーも編曲。

W.A.モーツァルト

(彼の生活)

- ・ザルツブルグの貴族の元で宮廷音楽家となるが、喧嘩して解雇される。
- ・ウィーンに移住して、フリーの音楽家となる。
- ・前職の経緯があり、ウィーンのハプスブルグ帝国の皇帝から警戒され冷遇。
- ・貴族の子弟にピアノを教えたり、作曲料で生活する（商業音楽家的生活）。
- ・後年、宮廷室内楽作曲家に任命されるが、これは薄給のポストであった。

古典派の作曲家



L.ヴァン・ベートーヴェン
Beethoven, L. V.

(1770-1827)

『ピアノソナタ 第21番 ハ長調
ヴァルトシュタイン』op.53 (1804)



彼の音楽活動を生涯支えてくれた
ボンの貴族、ヴァルトシュタイン伯
に捧げた曲。

L.V.ベートーヴェン

(彼の生活)

- ・14歳で宮廷礼拝堂のオルガニスト。
- ・17歳で尊敬するモーツァルトに会うためウィーンへ。しかし関心も持たれず。
- ・ボンの貴族・ヴァルトシュタイン伯に、生涯、彼の音楽活動は支えられた。
- ・22歳の時、ハイドンに認められ、ウィーンへ留学。そのまま移住。
- ・実は貴族に好かれる人であった。
- ・精神性の表現として象徴的な存在に思われるが、
実は、**ハイテク音楽**が大好きだった（ピアノのペダルの新たな使用法など）
- ・後年、ハプスブルグ家より年金を貰うが、自身の難聴と甥の放蕩に悩む。

主な参考文献

- 石井宏 (2004)『反音楽史:さらばベートーヴェン』新潮社
- 小田部胤久(2001)『芸術の逆説』東京大学出版会
- 岡田暁生(2005)『西洋音楽史』中公新書
- 佐々木健一 (2004)『美学への招待』中公新書
- ドナルド・H・ヴァン・エス (1981=1986)『西洋音楽史』新時代社
- 西村清和 (1995)『現代アートの哲学』産業図書
- パウル・ベッカー (1926=1951)『西洋音楽史』河出文庫
- ホルクハイマー&アドルノ (1947=1990)『啓蒙の弁証法』岩波書店
- 松宮秀治 (2008)『芸術崇拜の思想』白水社
- 渡辺裕 (1997)『音楽機械劇場』新書館